トピック ― だいこんの生産動向について ―

27.11.26

平成25年野菜生産出荷統計によると、野菜の出荷量は1145万1000トンであり、そのうち、キャベツ、たまねぎ、だいこん及びばれいしょの４品目で、全体の約５割に当たる538万7700トンを占め、だいこんは117万2000トンと、全体の１割を占めている。

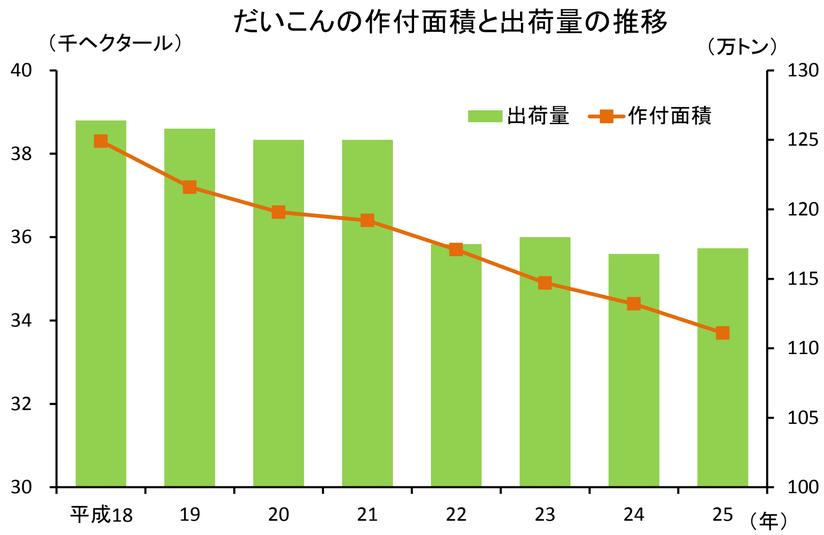
だいこんの作付面積の推移を見ると、平成25年の作付面積は3万3700ヘクタール（対18年比88%、4600ヘクタール減）と減少傾向で推移している。また、出荷量は、117万2000トン（同93%、9万2000トン減）で、作付面積同様に減少傾向で推移している。これは、生産者の高齢化が進む中で、重量野菜であり、収穫等に係る負担が大きいことなどが要因となっていると考えられる。

出荷量（産地別）の推移を見ると、全国的に減少傾向で推移している中、22年以降北海道が千葉県を上回り日本一となっている。これは、秋冬だいこんの主産地である千葉県が22年以降減少傾向となっていること、夏だいこんの主産地である北海道の出荷量が23年以降増加傾向となっていることによるものである。また、１年の中で出荷量の多い秋冬だいこんを見てみると、鹿児島県が7万8500トン（同116%）と、増加傾向で推移しており、主産地である宮崎県、神奈川県、千葉県と並んで、この４県で秋冬だいこんの約４割を出荷している。

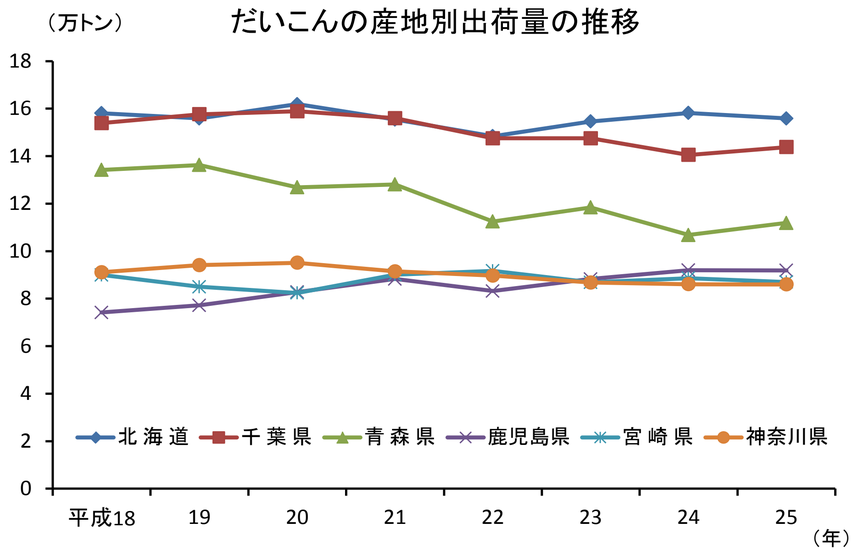
鹿児島県の出荷量が増加している背景には、生産者の高齢化などにより労働力不足が進む中、冬から春先の温暖な気候条件を活かして、農業生産法人などの大規模経営体がだいこんの担い手となりつつあることがあげられる。

だいこんと相性のいい食べ物はいろいろとあるが、秋といえばさんま、さんまといえばだいこん下ろしである。そこで今回は、総務省「家計調査」を基に、さんまとだいこんの購入量の相関関係を見てみる。16年のさんまとだいこんの購入量を100として、26年までのそれぞれの購入量を指数化し相関度合を分析した。この分析では、さんまの購入量が減少する年には、だいこんの購入量も減少傾向を示し、逆にさんまの購入量が増加する年には、だいこんの購入量も増加しており、統計学的にみてさんまとだいこんの購入量には正の相関関係があることが分かる。これは、家庭や外食において、さんまのつけあわせとしてだいこん下ろしが広く普及していることを裏付けるものであり、「秋刀魚」という字のごとく、秋のさんまのシーズンにおいて、だいこんの需要を予測する際には、さんま漁の状況を注視していくことが重要であることが分かる。

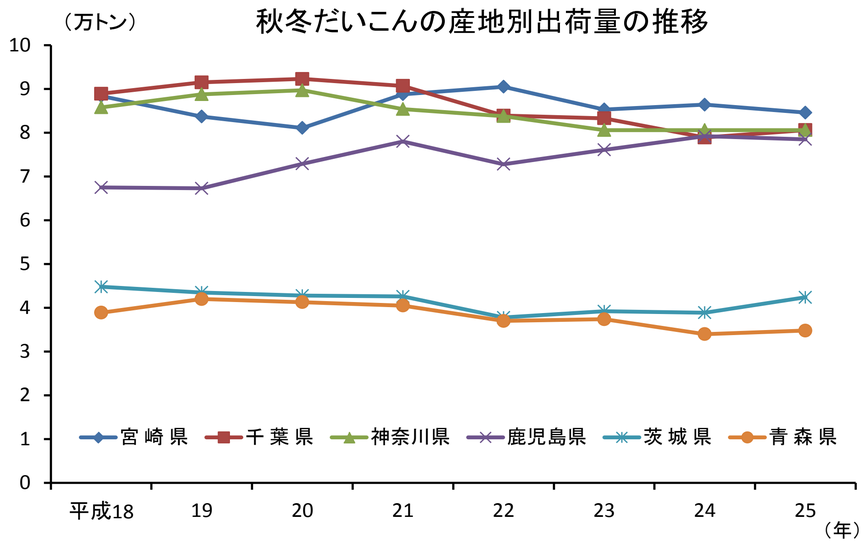
だいこんには、ナトリウムの排出を促進するカリウムが比較的多く含まれているので、だいこん下ろし以外にも、おでん、煮物、味噌汁、おろし鍋などで食して頂きたい。



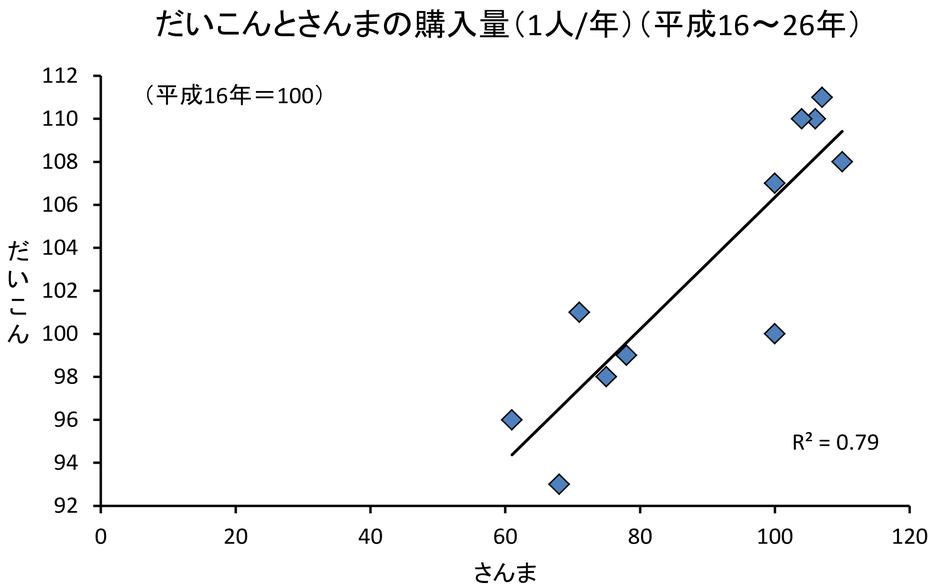
資料：ベジ探（原資料：農林水産省「平成25年野菜生産出荷統計」）



資料：ベジ探（原資料：農林水産省「平成25年野菜生産出荷統計」）



資料：ベジ探（原資料：農林水産省「平成25年野菜生産出荷統計」）



資料：ベジ探（原資料：総務省「家計調査」）

●問い合わせ先 独立行政法人農畜産業振興機構 野菜需給部 需給業務課 戸田、河原、斎藤、海老沼 TEL03-3583-9448、FAX03-3583-9484 ご意見、ご要望をお寄せください。

※無断転載禁ず ・トピックに記載された情報をご利用になったことにより生じたいかなる損害に関して、当機構は一切の責任を負いません。